

夢見るミュージシャンたち -- ジャマイカ、モンテゴ・ベイ (フォト・エッセイ)

著者	サカイ トオル
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	145
ページ	44-47
発行年	2007-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047081

□フォト・エッセイ□

夢見るミュージシャンたち ——ジャマイカ、モンテゴ・ベイ——

写真・文
サカイ トオル
Toru Sakai



マゼヤ・ブルミエールは、ニンジャマンのようなパフォーマンスを見せてくれた

一九八一年五月二二日、八カ月あまりの闘病生活の後にガンにより三六歳という若さでこの世を去ったボブ・マーリーは、ジャマイカ北部に位置しているナイン・マイルズという小さな村で眠っている。ボブ・マーリーの棺は、見晴しのいい丘の上に作られた教会風の建物に安置されていて、建物の中には、ステンドグラスから柔らかな陽光が入り込んでいる。

ボブ・マーリーが眠っている教会風の建物をシンボルとしている土地には、ボブ・マーリーの生家や、一三歳のときに首都のキングストンに移るまで暮らしていた小さな建物などが残されている。これらを管理しているのは、ナイン・マイルズで暮らしているラスタマン（ラスタファリズムを崇拜している人のこと。ラスタファリズムの意味は、四七ページ参照）たちで、土地全体がボブ・マーリーのメモリアル・パークのようになっていて。生家の向かいにあるナイン・マイルズ・ホテルには、外国からやって来る旅行者なども泊れるようになっていて、ボブ・マーリーの誕生日には、ミニ・コンサートなども行われている。

ボブ・マーリーの残した功績は大きい。レゲエという音楽は、アメリカを経由して世界中に広まり、数多くの国や地域でジャマイカ人ミュージシャンのCDやカセットテープが売られるようになった。このような状況を知る地元のミュージシャンたちは、世界進出も視野に入れている。ジャマイカ



モンテゴ・ベイのメイン・ストリートは、多くの人で溢れかえっていた



ビーチにあるカフェ・バーでくつろいでいると、DJがカセット・テープを売りに来た



ビーチ沿いのカフェ・バーで見かけたボブ・マーリーのデザイン画

北西部に位置しているモンテゴ・ベイという街には、ビッグになることを夢見ているミュージシャンたちが集まっている。

モンテゴ・ベイは、首都のキングストンと並んで空の玄関口となっているところだ。この街は、リゾート産業に力を入れているので、ビーチ沿いには、高級ホテルやレストラン、カフェ・バーなどが建ち並んでいる。週末、ビーチに行くと、アメリカやカナダなどからバカンスに来たカップルや、ビーチバレーを楽しんでいるグループの姿を見ることが出来る。ボブ・マーリーが世界進出のきっかけをつかんだキングストンのトレンチャタウンとは異なり、モンテゴ・ベイには、活気が満ちあふれている。

アメリカやカナダなどからやって来る観光客に人気のあるビーチ沿いのカフェ・バーでボブ・マーリーのデザイン画の写真を撮っていると、現地の音楽状況に詳しい男性と会った。彼によれば、「PJ・Sアマゾン」というナイトクラブで週末にコンサートが行われているという。

午後八時。「PJ・Sアマゾン」に足を運ぶと、すでにステージは始まっていた。青天井のクラブには、「スッチャ、スッチャ…」というレゲエのリズムが流れている。客層は、地元の人たちが七割、アメリカやカナダなどから来た観光客が三割といった感じだ。地元の人たちは、フロアに出て来るとリズムに合わせて踊っている。そのクラブは、入場料を取らないので、ショット



ラスタハアーのリトル・アナナは、モンテゴ・ベイで最も人気のあるミュージシャンだ



ナイトクラブには、ファッション・モデル顔負けの女性も来ていた



フロアには200人くらいのギャラリーが集まって、ハヤリの曲に合わせて踊っていた

・バーに行くような感覚で入って来る人もいる。ステージが終わってから、運良くミュージシャンに話を聞くことができた。ドレッドロックス（髪の毛を切らないことにより絡まって房状になった髪型のこと。レゲエの象徴）のリトル・アナナは、音楽的なことや将来のことを話してくれた。

「自分がテーマにしているのは、ラブ&ピースだ。ジャマイカには、日々の生活に困っている人たちが沢山いる。このような人たちを励ましたいと思っているんだ。ボブ・マーリーの歌からは、色々なことを教わったよ。だからどんなに生活が苦しくても、音楽を続けていくつもりでいる。ミュージシャンになることは、サッカー選手になるより難しいと思われるけど、絶対にあきらめないよ。キングストンに出て一旗揚げようと思っている人もいるけど、自分は、生まれ育ったモンテゴ・ベイでやっていくつもりなんだ。両親や妹もいるからね。今でもボブ・マーリーは、心の中で生き続けているよ!」

リトル・アナナは、発売されたばかりのセインチのレコードを手渡してくれた。また、ステージが終わった後に声をかけてくれたマゼヤ・プルミエールは、とても紳士的な態度で話をしてくれた。

「今日は、来てくれてありがとう。自分は、有名なミュージシャンのコピーをすることから始めたけど、やっと方向性が見えてきたところなんだ。影響を受けたのは、



観光客を相手にラスタカラー（黒、赤、緑、金（黄）の4色を指す）のアクセサリを売っているラスタマンもいた



ジャー・エチオピアは、「自分の写真も撮ってくれる？」と言って話しかけてきた



ズラッと並んでいる7インチのレコード。どれを買ったらいいのか迷ってしまう



ニンジャマンやバウンティ・キラー。彼らには、やんちゃなところもあるけれど、エンターテインメントというものを良く知っている。年内の目標は、7インチのレコードを出すことなんだ。みんなに自分の名前を知ってもらいたいからね」。

最後に話を聞くことができたジャー・エチオピアは、ラスタファリズム（ジャマイカで広まったアフリカ回帰運動に由来する宗教・生活様式。その影響を受けたボブ・マーリーのレゲエとともに世界的に知られるようになる）について話してくれた。

「ジャマイカには、ボブ・マーリーも信仰していたラスタファリズムが生きている。この教義では、人や自然を愛することが求められている。そのためには、まず自身を愛せるようにならないといけない。ラスタファリズムは、ラスタマンにとって一番大切なものなんだ。自分は、ラスタファリズムの精神を広めていこうと思っている！」。

彼らは、ボブ・マーリーの影響を受けて音楽活動を始めた。三人に共通しているのは、未来を信じてステージに立っていることだ。ジャマイカには、ミュージシャンになろうとしている人たちが星の数ほどいる。ビッグになるためには、数々の試練を乗り越えていかなければならない。彼らの話を聞いていると、そうした試練にも耐えているのではないかと思った。

（とかい）とおる／カメラマン